

## 令和 7 年度 大学活性化経費 事業成果報告書

事業区分 地域再生の核となる大学づくりに関する事業

申請組織 看護学部

申請組織長 役職名 学部長 教授 氏名 杉浦 美佐子

統括責任者 役職名 教授 氏名 福田 由紀子

課題名 いきいき暮らし応援サロン ―生活を支援する椋山『星が丘まちの保健室』―

	役割	氏名	所属・役職名	役割分担
事業組織	統括責任	福田 由紀子	看護学部 地域・在宅看護学 教授	高齢者を対象とした椋山『星が丘まちの保健室』事業統括としてすべてに責任を負う
		杉浦 美佐子	看護学部基礎看護学 教授	運営、企画立案
		又吉 忍	看護学部地域・在宅看護学 准教授	運営、企画立案、教室の実施
		中原弘喜	看護学部 助手	企画立案、教室の実施

## 1. 事業開始の背景・経緯や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

椋山『星が丘まちの保健室』は、地域住民が健康や生活に関する不安や困りごとを気軽に相談でき、ゆっくり語り合える場を提供することを目的として実施した。「まちの保健室」は、学校の保健室のように地域にも気軽に立ち寄れる相談の場を設けようという理念から始まり、大学や各都道府県看護協会で開催されている。本事業では主に地域の高齢者を対象とし、生活全般を支援することを目的に、健康教室、スマホ教室やお話会を通して健康・生活相談の機会を提供した。また、少子高齢社会における予防活動を推進するとともに、学生や教員の知的活動の活性化を図り、地域社会を支えるライフサポーターとしての役割を担うことを目指した。学生は学習段階に応じて参加し、地域住民との交流を通して地域看護の実践を学ぶ機会となった。

## 2. 事業方法（特色・独創性）等 (300 字程度で記述)

「まちの保健室」は、人々が気軽に集まり交流できる地域の居場所として開設されている。しかし、新型コロナウイルス感染後より、地域では ICT を活用したコミュニティづくりが進められている。椋山『星が丘まちの保健室』でも、集まることができない状況でも交流や相談が継続できるよう、ICT を活用したリモート形式での開催を行った。今年度は広報活動を行うとともに、行政組織と連携し、「認知症について学ぼう」「スマホお悩み相談室」「認知症サポーターフォローアップ講座」などの企画を実施し、地域住民の学びと交流の機会を提供した。

### 3. 事業の成果 (600字～800字程度で記述)

千種区および名東区のいきいき支援センターと協働し、看護学部1年生を対象とした認知症サポーター養成講座を実施している。本活動は、学生が入学初期から地域の健康課題や高齢社会に関心を持ち、地域住民との関わりを通して主体的にボランティア活動へ参加する意識を育むことを目的としている。また、地域住民、とくに高齢者が身近なICT機器を活用して社会参加や交流を継続できるよう支援することも視野に入れ、椋山『星が丘まちの保健室』のリモート開催に向けた基盤づくりとして、スマートフォン活用支援活動にも取り組んでいる。

具体的な活動として、第一に名東区南部いきいき支援センターと連携し、「スマホお悩み相談室」を実施した。2月13日および28日に学生6名が参加し、携帯電話の基本操作やSNSの利用方法など、高齢者が日常生活で感じているICTに関する困りごとに対し個別支援を行った。参加者一人ひとりの理解度に合わせた丁寧な支援を行うことで、高齢者がICTを活用することへの不安の軽減やデジタル機器への関心を高める機会となった。また、3月19日および28日にも学生が参加予定であり、継続的な支援体制の構築を進めている。

第二に、高齢者向け出前教室等の地域活動において、運営補助、健康教育、健康チェック（血圧測定・酸素飽和度測定）をはじめ、健康・生活・介護・認知症に関する相談対応、生活支援、手洗い指導などの教育活動を学生とともに実施した。学生は参加者の健康測定を行うとともに、認知症の症状や関わり方について説明を行い、地域住民の理解促進に努めた。これらの活動は、学生が地域住民と直接関わりながら健康支援の実践を学ぶ貴重な機会となっている。

第三に、12月19日には名東区南部いきいき支援センターと協働し、「認知症サポーターフォローアップ講座」を開催し、学生9名が参加した。講座では、認知症に関する理解をさらに深めるとともに、地域で認知症の人やその家族を支える具体的な関わり方について学習した。学生は講義やグループワークを通して地域支援の重要性を理解し、地域住民との交流を通じて実践的な学びを得ることができた。これらの取り組みを通して、学生は地域住民と直接関わりながら地域包括ケアの視点を学び、地域志向の看護実践能力を育むことができる。また、地域住民にとっても健康相談やICT活用支援などの機会が提供されることで、地域における健康づくりや社会参加の促進につながることで期待される。本活動は、大学と地域が連携した社会貢献活動として継続的に発展させていく予定である。

### 4. キーワード (本事業のキーワードを1つ以上8つ以内で記載)

①まちの保健室	②地域住民	③学生	④ICT
⑤健康教室	⑥ボランティア活動	⑦スマホ教室	⑧

5. 事業の達成状況及び今後の課題 (事業の達成状況を踏まえて、課題、反省点、及び今後の取組みを具体的に記載すること。また、イベント等実施の場合はその参加人数(外部・内部)についても明記すること。)

#### 【課題・反省点】

本年度は、企画していた椋山『星が丘まちの保健室』を名東区のいきいき支援センターと協働し実施することができた。次年度は、大学主催事業として実施したい。実施できなかった要因としては、実習施設との調整や教育日程との関係から、地域住民を対象とした健康教室や交流活動を十分に実施できる体制を整えることが難しかったことが挙げられる。今後は、実習時期や学生の参加状況を踏まえた計画的な開催体制を整える必要がある。また、対象を高齢者に限定するだけでなく、子どもや子育て世代を含めた多世代交流の視点を取り入れ、地域の健康づくりと世代間交流を促進する活動として『椋山まちの保健室』のあり方を再検討していく。

#### 【今後の取組み】

次年度は、学生と地域住民が交流できる健康教室や相談活動の実施に向け、地域住民、特に高齢者が参加しやすい時期や開催場所の検討を進める。開催場所は大学周辺地域を中心とし、『椋山まちの保健室』として千種区・名東区の行政組織と連携した事業への参画を積極的に行う。また、看護学部教員との協働体制を強化し、学生とともに継続的に実施できる教育・地域連携活動として発展させていく。さらに、本学の総合大学としての強みを生かし、学部横断的な連携を図りながら地域に開かれた健康支援活動として『椋山まちの保健室』の取り組みを推進していく。